

『古事記』 神話の一管見

——コトヨサシ・オヤ・コ——

國學院大學神道文化学部助教授

武田 秀章

はじめに

『古事記』をどのようにして読むのか、『古事記』の主題と構想をどのようにして見出すのか、という課題は、戦前・戦後の汗牛充棟ただならぬ『古事記』研究の蓄積を以ってしても、なお一致した見解を見出しがたい難問であるといえよう。

そもそも『古事記』は、その事実上の発掘者たる宣長以来、実に多様な視点から読まれてきた。戦前の代表的研究たる津田左右吉の記紀研究は、記紀を古代国家の統治者が自らの政治支配を正当化するために造作したものとして規定し、その成立をいわば遡源学的に検討した⁽¹⁾。戦後、盛行した比較神話学的研究は、記紀の個別の伝承を世界神話の諸類型にあてはめて、その普遍的意義を究明しようとするものであった⁽²⁾。

これに対して、近年の研究動向の特徴は、それまでの成立論から作品論への視座の転換といえることができよう。すなわち、記紀の作體的体系性・イデオロギー性という津田左右吉以来の枠組を前提としつつも、津田のような成立論的手法を避け、『古事記』と『日本書紀』の峻別の上に立ちつつ、『古事記』を、律令国家を根拠付ける一個の世界

観・政治思想を示す作品として解釈しようとするものである。⁽³⁾これらの研究は、『古事記』の作品としてのトータルな把握という点で、研究史に新境地を開拓したものとさえいえる。しかし、これらの斬新な諸研究にして、『古事記』を律令制といういわば外在的な枠の中に閉じ込め、ともすれば『古事記』を二元的な政治思想・政治目的に還元しようとする傾向が窺われるように思われる。

もとより『古事記』の何たるかは、あくまでも『古事記』の本文そのものによって、『古事記』に内在する文脈そのものに即して、そのモチーフと筋道が追求されなければならない。このように考える時、本稿がやはり注目せざるをえないのは、冒頭の天神諸の修理固成のコトヨサシである。このコトヨサシは、『日本書紀』本文には存在せず、『古事記』独自の設定であることは周知の通りである。

あらかじめ私見を先取りしていえば、『古事記』に一貫するのは、天上から発せられたコトヨサシを起点とするところの、「国作り（修理固成）の使命の、子々孫々の継承」というメイン・テーマであるように思われる。伊邪那岐命・伊邪那美命以来、連綿と続くコトヨサシ継承の過程は、とりもなおさず二神以来の国作りの営みが、世代から世代へと受け継がれてゆく過程でもあった。すなわち、当初の修理固成の使命―混沌から秩序を作り出す使命―が、オヤからコへと受け継がれ、やがて天皇を戴く豊葦原水穗国の形成へと導かれてゆく、というのが、『古事記』の物語の大きな流れであると考えるのである。

詳細な考察は他日に譲り、とりあえず本稿においては、あくまでもひとつのラフ・スケッチとして、『古事記』の国作りの物語のおおまかなアウトラインを辿り、そこに一貫する「オヤからコへの国作りの継承」の筋道を探ってゆきたい。

一、天神諸のコトヨサシ

『古事記』は、日本の国作りの物語を、天地の開闢にさかのぼって語り始める。すなわち、天地初発の混沌の中から、産巢日二神の生成の靈力の作用によって、葦の芽のごとき生命の萌芽が発生し、やがて「遠つオヤ」たる伊邪那岐神・伊邪那美神が誕生するに至る。

天神諸は、伊邪那岐命・伊邪那美命に対して、「修理固成是多陀用弊流之国」というコトヨサシを与えた⁽⁴⁾。まず修理の訓読について見れば、宣長が、「修理」を、「つくりかため」と訓み、「修理は、ただ作と書くと同じことなり……」と註して以来、現在に至るまで、「修理」を「つくる」とするのがほぼ一般的な訓みとなっている⁽⁵⁾。これに対して、最近、山崎かおり氏が、修理固成の修が、政治的に治める・統治するの意に通じ、二神の国生みのみならず、歴代天皇の統治までもがその射程に入っている可能性があることを指摘した⁽⁶⁾。この指摘を十分に考慮しなければならぬであろう。

『古事記』は、皇孫統治を、一貫して「治」の語を用いて示している。しかし修理固成の「修」を「おさむ」と訓み、それがやまとことばの「おさむ」と呼応していると考えらるなら、天神諸のコトヨサシには、「多陀用弊流之国」を作り固め成すことと共に、「多陀用弊流之国」を治めること・統治することが含まれていると解し得るであろう。そうであれば、修理固成のコトヨサシは、神代の国作りのみならず、神代以後の天皇統治までを射程に収める『古事記』全体のキーワードとして位置付けることができるのではないだろうか。筆者は、以上の点をも踏まえ、修理固成の意義を、単に国土の修理固成を意味するのみならず、幅広く「おさめつくる」⁽⁷⁾「既にあるものをつくりたいとのえる」こと、すなわち所与の混沌から、あるべき秩序を生み出す意味にとりたいたいと思う。

二、コトヨサシの継承—オヤからコへ—

天神諸の修理固成のコトヨサシをかく解した上で、さらに重要なことは、このコトヨサシが、伊邪那岐命の子孫に
よつて、オヤからコへと受け継がれていった筋道を見定めることであろう。⁽⁸⁾すなわちこのコトヨサシの意義は、それ
が世代を追つて「継承」されていった、ということにこそある、と考えるのである。⁽⁹⁾以下では、天神諸のコトヨサシ
を承けた、世代から世代へのコトヨサシ継受の筋道を辿つてゆきたい。

伊邪那岐命↓天照大御神・月読命・須佐之男命

伊邪那岐命は、「筑紫日向之橘小戸之阿波岐原」の禊において誕生した三貴子、天照大御神・月読命・須佐之男命
に、それぞれ高天原・夜の食国・海原の統治を命じた。いわゆる三貴子分治のコトヨサシである。このコトヨサシは、
これに先立つ天神諸の修理固成のコトヨサシを承け、その使命を、次世代の後継者たちに受け渡すものとして捉える
ことができよう。

須佐之男命↓大国主神

須佐之男命は、根の国を訪れてきた子孫、大穴牟遲神を、諸々の試練によつて鍛え上げたのち、大国主神の名を与
え、葦原の中つ国の国作りを継承すべき使命を託した。『古事記』の白眉ともいふべきこの須佐之男命の呼ばいの言
葉も、本稿の視点からすれば、須佐之男命が、自らの後継者として成長した大穴牟遲神に、中つ国の国作り完遂の言
いつけ—コトヨサシ—を与える意義を担うものであつたと考えることができる。遠呂智退治によつて葦原の中つ国の
始祖たる神となつた須佐之男命は、父たる伊邪那岐命のコトヨサシを、ここにおいて自らの六世の子孫たる大穴牟遲
神（大国主神）へとバトン・タッチした、と見ることはできるのであるのではないだろうか。

天照大御神↓邇邇芸命

天照大御神は、誕生したばかりの孫、邇邇芸命に、地上の「水穂国」としての統治を命じ、供奉の神々を添えて天降りせしめた。伊邪那岐命のコトヨサシを体して天上統治の神として君臨していた天照大御神は、ここに至って、地上統治の使命を、御子の邇邇芸命に託した、ということが出来る。伊邪那岐命から天照大御神に委任された秩序形成の使命は、ここにおいて天照大御神から邇邇芸命へと委ねられたのである。

天照大御神↓神倭伊波礼毘古命

天孫の天の下統治という課題は、邇邇芸命の曾孫たる神倭伊波礼毘古命に引き継がれる。すなわち神倭伊波礼毘古命の東征は、天の下の秩序形成を命じた天照大御神のコトヨサシの実現を目指して行われたものであると考えることができる。かくして神代の初発、天神諸のコトヨサシに始まり、伊邪那岐命、天照大御神、須佐之男命、大国主神、邇邇芸命、神倭伊波礼毘古命に至るまでの各世代が、コトヨサシの連鎖によつて連なつてゆく。このように、世代から世代へのコトヨサシの受け継ぎが、「古事記」を一筋の糸のように貫いているのである。

三、国作りの進展

こうしたコトヨサシの継承の過程は、同時に、国作りの営み―混沌から秩序を作り出す営み―が、それぞれの世代ごとに、漸次的・段階的に進展してゆく過程であつた。⁽¹⁰⁾以下、この過程を簡単に跡付けてゆきたい。

伊邪那岐命・伊邪那美命―国土の誕生―

天神諸のコトヨサシを承けた伊邪那岐命・伊邪那美命により、この「多陀用弊流之国」が大八嶋国へと形作られていった。くらげなす海原に、伊邪那岐命・伊邪那美命の生みの子として、日本列島の島々のひとつひとつが、次々と

誕生してゆく(国生み)。ついで二神は、国土の自然の働きをつかさどる諸々の神々をも、血を分けたはらからとして次々と産みなしてゆく(神生み)。国家形成の土台となる大八島国の国土は、かく誕生したのである。

天照大御神―天上の秩序化

天照大御神の天の石屋戸の物語は、新生した日の大神を戴く、天上秩序の誕生の物語ともいい得よう。すなわち、天上の神々の総力を結集した祭りによって、常夜ゆく暗黒と混沌が收拾され、天照大御神は、名にし負う天上の日の大神として再生することを得たのである。ここにおいて、当初の伊邪那岐命のコトヨサシを承け、天照大御神を奉戴する天上の祭政の秩序が生み出されるに至ったということができよう。

須佐之男命―地上の秩序化の開始

天照大御神を戴く天上秩序の確立に呼応するかのようには、地上においても、須佐男命を担い手として、秩序形成の端緒が開かれる。すなわち天降った須佐之男命は、出雲の国つ神を率いて、未開と混沌の象徴のような八咫遠呂智を退治した。須佐之男命は、櫛名田比売と共に須賀の稲田宮に宮居し、葦原の地を農耕社会へと導いてゆく国作りを開始してゆく。

大国主神―地上の秩序化の進展

葦原の中つ国の国作りを受け継いだのは、須佐之男命の六代目の子孫、大国主神であった。大国主神は、中つ国の国作りの主たる神として各地を巡幸し、国を作り堅めてゆく。須佐之男命の遠呂智退治を端緒とする葦原の中つ国としての国作り・秩序形成は、かくてその子孫たる大国主神の手によって、完成へと導かれてゆくことになる。

邇邇芸命―地上の皇孫統治の開始・水穂国としての秩序形成の出發

天孫降臨を前にして、従前の葦原の中つ国は、天照大御神によって「豊葦原水穂国」(豊かな稲穂の稔りを予祝する命名)と名付けられる。天照大御神のコトヨサシを承けて天降った邇邇芸命の使命は、天上に由来する神聖な祭政の秩序、

天上に由来する稲作りと祭りを、地上の国土に将来することであつた。⁽¹¹⁾かくして天神の御子を戴きつつ、葦を育んできた生態系を稲作りに向け再編成してゆく遠大な営みが、その端緒を告げることになつたのである。⁽¹²⁾

神倭伊波礼毘古命―地上の皇孫統治の実現

天照大御神のコトヨサシの実現を目指し、中原に向けて出発したのが、神倭伊波礼毘古命であつた。神倭伊波礼毘古命は、大和平定により、天の下しろしめす初代の天皇として君臨するに至つた。かくして高天原から降臨した「天神の御子」が、天の下の全体に新たな秩序をもたらす王政を開始することになつたのである。

以上、概観してきたように、『古事記』は、天神諸のコトヨサシが、オヤからコへと受け継がれ、各々の世代の国作りの積み重ねによつて、「水穂国」としての日本の国家形成が成就してゆく物語を生き生きと語るものであつた。その過程は、原初の「多陀用弊流之国」に、修理固成の営み―混沌から秩序を生み出す営みが及んでゆき、ついに天つ神の御子を戴く豊葦原水穂国の形成へと至る道行であつたといえよう。

四、国作りの担い手の誕生と成長

このようにして、世代から世代へと受け継がれてゆく国作りの物語において、もつとも神的な出来事として語られるのは、新しい国作りの担い手の誕生ということであつた。『古事記』は、そのようにしてみ生れしたコゝの、国作りの担い手としての成長の物語を、興味深く語り継いでゆく。⁽¹³⁾以下、その概略を辿つてみたい。

伊邪那岐命・伊邪那美命の誕生と成長

遠つオヤたる伊邪那岐命・伊邪那美命誕生に至る過程を語るのが、神代七代の段であつた。すなわち、天地初発の混沌の只中、産巢日二神の生成の靈力的作用によつて、生命の萌芽が発生し、雌雄の生命が宿り、男女の身体が成り、

やがて各々の「面」が充足してゆく。⁽¹⁴⁾ 神代七代においては、生命の誕生と成長のイメージが、葦の発芽・成長のイメージと二重写しにされつつ、きわめて玄妙に語られているといえよう。かく誕生した二神は、もって生まれた命を産み出す働きによって、国土と神々を次々に繁殖させてゆく。

伊邪那岐命は、黄泉の国の破局を経て、黄泉比良坂における伊邪那美命との事戸の度しにおいて、死を乗り越える生命誕生の原則、生命の無限の連鎖の原則を宣言するに至る。この言挙げのままに、禊という再生の祭儀において、伊邪那岐命のいわば跡継ぎたる三貴神の誕生がもたらされる。

天照大御神の誕生と成長

天照大御神は、父たる伊邪那岐命の、禊による神威のよみがえりの中から、いわば一回限りの出来事として誕生した神であった。しかし、天照大御神は、須佐之男命の荒ぶる振る舞いになんら対処し得ず、なすすべもなく石戸の中に引きこもり、世界を大混乱に陥れてしまうような未熟な神に過ぎなかつた。前述したように、天の石屋戸の物語は、このような天照大御神が、八百万の神の祭りを承け、天上の主宰神として、日の大神として新生し、生まれ変わる物語だったのである。

須佐之男命の誕生と成長

天照大御神の弟神たる須佐之男命も、伊邪那岐命の禊による再生の力から生まれた貴子であつた。当初は、須佐之男命も、妣恋いの号泣で世界を破局に陥れ、また勝さびで天上を大混乱に陥れるような荒れすさぶ神であつたが、遠呂智退治の試練を乗り越え、恋人の櫛名田比売との聖婚を果たし、葦原の中つ国の国作りの始祖へと成長していったのである。

大国主神の誕生と成長

須佐之男命と櫛名田比売との聖婚に発する六代の系譜を承け、大穴牟遲神、のちの大国主神が誕生する。大穴牟遲

神は、稲羽の素戔を救うような生来の智慧と優しさの持ち主であったが、当初は八十神の理不尽な迫害に甘んずる惨めな神に過ぎなかった。しかし、諸々の迫害、諸々の試練を次々と乗り越えた大穴牟遲神は、ついに中つ国の国作りの主たる「大國主神」へと脱皮するに至る。かくして大國主神は、須佐之男命の遠呂智退治に始まった葦原の中つ国の国作りを、完成に向けて近付けてゆく。

邇邇岐命の誕生

邇邇芸命の父、天忍穗耳命は、各地の国造の始祖となった天菩比神以下の四神と共に、天照大御神の宇氣比によって誕生した神であった。そのような神的出自を有する天忍穗耳命が、高御産巢日神の娘、万幡豊秋津師比売と結婚して誕生したコが、邇邇芸命にほかならなかった。邇邇芸命の誕生は、天孫降臨という至上の大事を予祝する、新たな生命誕生の慶事にほかならなかった。それこそは、地上における新たな秩序形成の開始に際しての、新たな君主のみ生れにほかならなかったのである。

神倭伊波礼毘古命の誕生と成長

神倭伊波礼毘古命の父、鵜葺草葺不合命は、燃え上がる産屋で誕生した。この出産は、天つ神の御子か否かを占うという意味において一種の宇氣比であり、宇氣比による神的誕生のプロットの反復と見ることができよう。このようにして誕生した鵜葺草葺不合命の第四子が、神倭伊波礼毘古命であった。

長じて東征の途に出発した神倭伊波礼毘古命は、浪速の青雲の白肩津における敗退、熊野山中における試練等々、度重なる危機を乗り越え、ついに大和を平定し、初代天皇として天の下に君臨するに至る。天皇は、大和の地主神ともいふべき美和の大物主神の娘、伊須気余理比売と聖婚し、天つ神の血統を伝える子孫を育んでゆく。

このようにして『古事記』は、あらたなコの誕生を、一貫して神的な力の発現として語っていたのである。古語の「あれつぐ」とは、生命の更新・霊力の更新によるその連綿たる継承という意味であった。⁽¹⁵⁾まさに『古事記』は、

代々の子孫が、始祖の靈威と使命を更新しつつ次々と「あれつく」物語であると共に、そのようにして生れ継いだことたちの、国作りの担い手としての成長の次第を語る物語であったといえよう。

五、他界の加護

『古事記』に伏在するもうひとつのバック・ボーンというべきは、こうした子々孫々の国作りの営みが、常に「他界」によって見守られ、時としてその支援をうけつつ在る、という枠組であるように思われる。いいかえれば、『古事記』は、子々孫々の営みが、常に他界の照覧と加護のもとにある、ということを繰り返して語っているように考えられるのである。以下、この点を跡付けてゆきたい。

高天原と伊邪那岐命・伊邪那美命

伊邪那岐命・伊邪那美命は、当初の子生み失敗を承け、天上に昇つて天神諸に教示を乞うた。かくして二神の国生み・神生みは、天上の他界―高天原の天神諸の導きのもとに成就することを得たのである。そもそも高天原は、地上統治の正統性が由来するところの一つの超越的な他界であった。ここには、修理固成の営みが、天上の他界の支援のもとにあるというプロットの端緒が示されていると考えられるのである。

高天原と須佐之男命

須佐之男命は遠呂智退治ののち、天照大御神に都牟刈之太刀を献上する。この神剣が、のちに三種の神器のひとつとして位置付けられたことを併せ考えれば、須佐之男命の太刀献上は、あるいは遠呂智退治への天上の加護に対する「奉賽」の意味があったのかもしれない。須佐之男命の遠呂智退治と国作りの開始も、天上の照覧のもとに在った可能性を想定することができるのではないだろうか。

高天原・根の堅洲国と大国主神

かの大穴牟遲神の復活も、天上の神産巢日神の加護によるものであった。すなわち、八十神の畏によって一旦絶命した大穴牟遲神は、神産巢日神が天上から差し向けた二女神の働きによって、再び蘇生することを得たのである。それは、次代の国作りの担い手たるべき者への、天上他界からの緊急支援としての意義を有するものであった、ということができのではないだろうか。

同様に、大穴牟遲神の「根の堅洲国」訪問の物語も、大穴牟遲神が、地の底の他界で、中つ国の主たる根源的な力を獲得する物語であった。大穴牟遲神は、祖神須佐之男大神の課す諸々の試練を乗り越え、ついに大神の宝器たる生太刀・生弓矢と、その娘須勢里毘売を獲得するに至る。大穴牟遲神は、他界である根の国に赴くことによって、始祖たる須佐之男大神の靈威と、中つ国の国作りの主としての資格を、わがものとするのであったのである。かくして地上に帰還した大国主神は、天上からやってきた少名毘古名神の補佐、また地の底の他界から同伴した須勢里毘売の内助等、他界からもたらされた諸力を背景として、葦原中つ国の国作りを完成に向けて導いてゆく。

高天原と邇邇芸命

邇邇芸命は、天上の他界たる高天原から、天降った神であった。他界の聖性の結晶ともいべき邇邇芸命の使命は、天上に由来する神聖秩序を、地上の国土にもたらすことにあった。降臨直後、邇邇芸命は、高千穂の嶺において国見を行い、国ぼめの言葉を発した（「此地者、向韓国、真来通笠沙之御前而、朝日之直刺国、夕日之日照国也。故、此地、甚吉地」）。この言葉は、地上における天孫の君臨が、天上の日神の照覧と恩恵を、朝日に夕日に享受しつつ在ることを謳ったものとうけとれよう。すなわちこの言挙げこそは、皇孫統治が、天上他界の加護と照覧のもとに在る、という大原則の宣明にほかならなかった、と考えることができよう。

海神の宮と日子穗穗手見命

日子穗穗手見命の海神の宮訪問も、同様に、海底の他界に赴き、そこで他界に由来する根源的な力―水を司る力を獲得する物語である。もちろん海神は祖霊とはいえないものの、『古事記』の神統譜において、海神たる大綿津見神が伊邪那岐命・伊邪那美命の生みの子として位置付けられていることは留意されなければならないであろう。つまり日子穗穗手見命は、海神の宮から将来した靈威を背景に、元神を退け、正統の君主たる立場をわがものとする事ができた、考えることができるのである。

高天原と神倭伊波礼毘古命

神倭伊波礼毘古命の東征も、同様に、天上の照覧と加護のもとに行われたものであった。神倭伊波礼毘古命は、天の下の政の総覧するために東に向かつて出発するが、浪速で登美能那賀須泥毘古の迎撃をうけ敗退を余儀なくされる。ここで痛手を負った五瀬命は、「吾者、為日神之御子、向日而戦、不良。故、負賤奴之痛手。自今者、行廻而背負日以撃、」と痛憤の言葉を発する。すなわち、日の大神の御子は、祖神たる日の大神の加護を得てこそ、勝利に導かれるのだ、という意味であろう。

神倭伊波礼毘古命は、五瀬命の言挙げのままに、日神の加護を背にうけて戦うべく、紀伊半島の東海岸から再上陸し、天上の加護を得て、数々の難局を次々に突破してゆく。すなわち、天照大御神・高木神（高御産巢日神）の差し向けた天剣の靈威、八咫鳥の導きを得て、再生の地たる吉野へと進むことを得たのである。悪しき神・荒ぶる神が跳梁する熊野山中を一種の「山中他界」であると考えれば、それは「山中他界」からの、天つ神の冥助による生還ともいうことができよう。

かくして神倭伊波礼毘古命は、大和平定を成し遂げ、天の下を治めるべき初代君主として君臨するに至ったのである。翻って考えれば、「天神の御子」の統治は、王権がそこに由来する他界、高天原からの加護と照覧を、その不可欠のうしろだてとするものであった。やまとことばの「あめのした」という語には、天上の他界たる高天原の祖神の

照覧と加護のもとにある世界、「天神の御子」が天上他界の見守りを享けながら治めるべき地上世界、という含意が込められているように思われる⁽¹⁶⁾。そうであれば、天皇の和訓、「あめのしたしろしめすすめらみこと」とは、「天上の祖神の照覧と加護を得て、国土全体をあまねく治める君主」という意義を有するものであった、と考えることができるとはならないだろうか。

以上のように、『古事記』の物語において、世代から世代へと受け渡されてゆく国作りは、同時に、天上や地下の他界の加護を享けつつ進められていったのであった。そもそも他界とは、未完の国作りを完成に導く根源的な力をもたらしどころであった。そこには、この世の営みが、不可視の祖霊の加護のもとにあるという想念の、いわば端的な説話化あった、とはいえないであろうか。

おわりに

以上、コトヨサシとその子々孫々の継承という構図のもとに、『古事記』の物語の流れをごくおおまかに辿ってきた。そこには、連綿たる生命の継承、世代から世代への国作りの使命の継承が、繰り返し語られていたのである。

周知のように、『古事記』編纂の発意者、天武天皇は、帝紀・本辞を「邦家之経緯」「王化之鴻基」として意義付けた。まことに『古事記』は、経としての皇室系譜、緯としての神々の系譜・諸氏族の系譜によって織り成されてゆく世界にほかならなかった⁽¹⁷⁾。

そもそも『古事記』の原風景ともいべきは、天上の産巢日二神の導きを承け、葦牙のごとき命のきざしが萌え膳る情景であろう。萌え出ずる葦芽が次々と繁殖してゆくが如く、さざれ石が仰ぎ見るが如き巨石へと成長するが如く、皇統という不動の幹のもとに、神々の系譜という枝葉、臣下の系譜という枝葉が繁茂しつつ、階層的一大系譜が生成

してゆく。このようにして『古事記』は、天地初発に根源する皇統譜を機軸として、諸氏族・天下公民を包摂する一大系譜、オヤからコへの生命の連鎖に伴って永続してゆく同族国家の一大系譜の生成過程を、具さに語るものであったということができよう。

さらに『古事記』は、こうした連綿たる営みが、他界の照覧と加護と共に在るものであることをも繰り返し語った。現世の国作りは、高天原をはじめとする諸々の他界の霊的な力を享けることによつて導かれてゆく。現世の営みが、現世とは異なる世界の冥助によつて支えられているという枠組の裡に、伝来の祖霊観・他界観と呼応する『古事記』の祖霊観・他界観の特質を見究めることができるように思われる。

このように見てくれば、近年の作品論の諸研究が揃つて強調するように、『古事記』を律令制度のみを根拠付ける作品として限定的に捉えることは、多分に留保を要することが了解されよう。そもそも『古事記』本来の意図は、『いま』をはるかに遡る「いにしえ」の根源から発した「天神の御子」の系譜の無窮性、その枝葉として広がる同族系譜の無限性、永劫の過去から継受され続けてきた修理固成の使命―混沌から秩序を生み出す使命―の永遠性を語ることにあつた、と考えることができるのではないだろうか。コトヨサシの継承、オヤからコの使命の継承を核心とする『古事記』の独自の構図は、このようなところに求めることができるものと思われる。

以上、極めて大雑把な見取り図を示すのみに終始した。本稿の論点の具体的な考察については、あらためて他日を期したい。何分にも門外漢の論稿ゆえに、数々の初歩的誤りを犯しているのではないかと懼れている。大方の批正を待つのみである。

註

(1) 津田左右吉『日本古典の研究』上下（津田左右吉全集）第一巻、第二巻、岩波書店、昭和三八年）、同『神代史の新し

い研究」〔津田左右吉全集〕別館第一、岩波書店、昭和四一年。

(2) 吉田敦彦『繩文土偶の神話学』(名著刊行会、昭和六一年)、同。『日本神話のなりたち』(青土社、一九九二年)、河合隼雄・湯浅泰雄・吉田敦彦『日本神話の思想―スサノオ論―』(ミネルヴァ書房、一九八三年)参照。

(3) 神野志隆光『古事記の達成』(東京大学出版会、一九八三年)、同。『古事記の世界観』(吉川弘文館、一九八六年)、同。『古事記―天皇の世界の物語―』(日本放送出版協会、一九九五年)。神野志隆光編『古事記』の現在』(笠間書院、平成一年)、水林彪『記紀神話と王権の祭り』岩波書店、一九九一年。

(4) このコトヨサシの意義については、石坂正蔵『言向考』(『国語と国文学』二〇巻七号、昭和一八年)、藤井信男『古事記と祝詞との交渉―みこともちて考―』(『歴史と国文学』二三巻三号、昭和一五年)、西田長男『日本神道史研究』第二巻・古代編(上)、(講談社、昭和五三年)入江滑『コトヨサシの解義』(『皇學館論叢』一八巻二号、昭和六十年)、土井忠生『言依考』(『国語史論攷』所収、昭和五二年)、鈴木啓之『古事記神話における「ミコトモチ」「コトヨサシ」の意義』(『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』二〇輯、昭和六三年)、寺川真知夫『天神諸と「古事記」冒頭部』(『古事記年報』三九輯、平成八年)、金井清一『古事記上巻「天神諸命以」論』(『京都産業大学日本文化研究所紀要』三号、平成一〇年)等参照。

(5) 『本居宣長全集』第九卷、一五九頁(筑摩書房、昭和四三年)。

(6) 山崎かおり『古事記「修理固成」の意義』(『國學院大學大学院文学研究科論集』二五号、平成一〇年)。

(7) 倉野憲司『古事記全注釈』第二巻上巻編(上)、(三省堂、昭和四九年)、七六頁。

(8) コトヨサシが『古事記』神代を貫く理念であることについては、夙に幕末維新期の国学者、大國隆正が指摘していた。隆正は、天神諸に発し、伊邪那岐命・天照大御神を経て、邇邇芸命に至るコトヨサシの継承を、『三度のクニヨサシ』と規定し、これを「天皇の御系譜にみえたる大事」と位置付けた(『大國隆正全集』第一巻、有光社、昭和一二年、七頁)。本稿は、隆正の「三度のコトヨサシ」観から大きな示唆をうけている。尚、「三度のコトヨサシ」観を基軸とする隆正の国学思想の特質については、拙稿「ペリー来航と大國隆正」(『神道学』一四〇号、一九八九)、同「文久・慶応期の大國隆正」(『國學院大學日本文化研究所紀要』六四輯、一九八九)参照。

- (9) 梅田徹「古事記」の「神代」—根本原理としての「コトヨサシ」—(『国語と国文学』六二巻八号、昭和六〇年) 参照。梅田氏は、この「コトヨサシ」を、「古事記」の「神代」の理念を集約するキーワードとして位置付けた。
- (10) 「古事記」神代が一貫して混沌の秩序化を志向するものであることについては、矢鳥泉「悪神之音如狭蠅皆満 万物之妖悉起—「古事記」神話の論理」(『聖心女子大学論叢』六七輯、昭和六一年) 参照。
- (11) 天神の御子の統治を天上に根源するものとして意義付ける「古事記」の基本構想については、毛利正守「古事記の構想—文脈論的見地から—」(『古事記年報』三八号、平成七年)。
- (12) 「水穂の国」の語の文化論的解釈については、西郷信綱「豊葦原水穂国」とは何か—その政治的・文化的な考察—(『思想』八九五号、一九九九年一月) 参照。
- (13) 「古事記」が、いわば「できそこない」の神々の成長の物語であったことについては、高森明勲「はじめて読む「日本の神話」」(展転社、平成一二年) 参照。
- (14) 神代七代の解釈については、金井清一「神代七代の系譜について」(『古典と現代』四九、一九八一年)、毛利正守「古事記冒頭の文脈論的解釈」(『美夫君志』三八、一九八九年) 参照。
- (15) 上代社会における同族系譜の意義と役割については、義江明子「日本古代系譜様式論」(吉川弘文館、平成一二年) 参照。
- (16) アメノシタの語の解釈については、遠山一郎「アメノシタの成立」(『国語国文』五一巻七号、昭和五二七年) 参照。
- (17) 「古事記」の系譜的構造の形成については、西條勉「古事記の資料系統—(モトツギ) 構造の解体と再編—」(『国文学研究国文学論叢』一八号、平成一〇年) 参照。